

第四回 中城ふみ子賞作品（抄）

大賞 『月の河』 葉月 詠

加湿器のやうな家族の感情が雪の夜更けの部屋満たしゆく
秋の野の芒になりたき母のため月の光の夜に連れ出す

潮騒のやうな音立て作動する食器洗ひ機の中の内海

難解な数式が黒板に書かれみる前で明るく着替へする女子
文語体の街にしあれば京の夜を変体仮名のやうにさまよふ

次席 『回路』 若草 のみち

いつか見たモンシロチョウや菜の花も回路になって体を巡る
飛んでいる鳥の翼の逆光は見上げる人のためだけにある

ゆっくりと沈んでいった捨てられず水に放った玩具の金魚は

次席 『溪谷』 松木 夜鷹

往来に石罅ひとつ落ちていて白き肌を晒せるあわれ

握手するときと同じに手のひらを見せて雨粒うけとめている
真っ白き子猫をひとつ持ち帰りパブロフなどと名づけてみたし

次席 『平面世界』 新田 瑛

平行でない直線と直線は交わるようになってる世界
有限の果ては素数の不確かさまた確かさに守られており
息継ぎができない者の苦しみに気付かないほど幸せであれ

佳作 『青葉潮』 相澤 由紀子

みそらより誰か梯子を降ろしゆく気配感じる田植えのころは

佳作 『生活』 正樂地 咲

君が泣く僕は見つめる無遠慮に水中メガネ越しの玉ねぎ

佳作 『桜舟』 中畑 智江

ポケットまで畳まれているスプリングコート 風など忘れてしまった

佳作 『夜はこれから』 近藤 かすみ

きみといふ一冊の本読みあぐねあまた付箋をはがせずにゐる